

一北の子

豊かな心をもった、たくましい子

＜よく考える子・助け合う子・進んでやる子＞



大和第一北小学校
学校だより No. 11
平成31年2月20日

万場からの風景

南北にひらけている万場の地形は、季節や時間によって、風光明媚な風景をつくりだしています。右の写真は1月の早朝、学校の駐車場から見た南南東の空の朝焼けです。上の方に輝いているのは、明けの明星「金星」でしょうか。一方、北の方角を見ると、天気の良い冬の日には、雪をかぶった大日岳の稜線を望むことができます。右端には、ダイナランドスキー場のグレンデが、左の端にはウイングヒルズスキー場の3本のグレンデが見えます。そしてその上に少し頭を出しているのは、白山連邦の別山で、それに連なって少しだけ見えるのは、白山連峰の最高点である御前峰（ごぜんがみね）につながる稜線でしょうか。



また万場は、清流長良川の恩恵（白鳥町の越佐を源流とする万場用水の豊富な水）を受け、米作りが盛んな地域であり、長良川を挟んだ向かい側の山の上には、郡上市の重要な史跡であり、一時期この地方の政治の中心であった阿千葉城跡もあります。また、郡上の重要な交通機関である長良川鉄道は、万場を南北に貫いており、その前身である越美南線の歴史をたどることにより、万場の大正・昭和・平成の歴史の変遷の一端が見えてくるのかもしれない。



プログラミング教育と英語(5・6年生)の授業・外国語活動(3・4年生)

2018年度から、道徳が「特別な教科道徳」として、教科の一つとなりました。また、2020年度からは、英語の授業が5・6年生で週2時間の年間70時間、教科として正式に実施されることとなります。英語の授業については、本年度から本校でも授業時数を増やし、準備を整えているところです。さらにプログラミングの授業も小学校で新たに導入されることになりました。本年度は、2020年度に向けたプログラミ



ングの授業を6年生で2時間、試験的に実施しました。講師は「ハブ郡上」の専門家で、授業内容は、「プログラミングって何だろう？」から始まり、最終的にはプログラムをパソコンに入力し、実際にロボットを動かしたり、光センサーによって白線上で停止させたりする学習でした。いろいろな動きをロボットに命令し、複数の動きができるようにする。こういったプログラミングの学習や、世界中の人たちとコミュニケーションを図るための英語の学習は、10年後、20年後の社会で子どもたちが自分の力を発揮し、活躍できるようになるためのものです。これからの学校では、新たな学習や新たな取組が始まります。



大なわ(8の字)とび大会

2月12日に、全校で大縄(8の字)跳び大会を行いました。結果は、下の写真に写っている1チーム(本多珠々奈さん、和田怜也さん、大中惟央さん、桑田理史さん、稲葉琉斗さん、井上万緒さん、西村香依良さん、篠大翔さん、藤原寧叶さん、大中笑さん、寛宗馬さんのチーム)が257回で優勝しました。2位の4チームも、練習での最高記録を100回近くも更新する234回という素晴らしい記録でした。

1・2年生の児童の中には、縄に引っかかって何度も転んだり、回っている縄が顔にあたって痛い思いをしたりして、やりたくないという思いになった児童もいたと思います。しかし、そんな思いをしながらも、休んだり見学したりせず、みんなといっしょに8の字跳びに挑戦するたくましさが出てきました。また、5・6年生の児童の中には、タイミングよく縄の中に入っていけない低学年の児童の後ろに立ち、動き出しのタイミングを背中を押すことによって教え、そのあと、自分もすぐに縄の中に入っていくという2つの動きを同時にしている児童がいました。特に3チームは、本番では142回という最下位の記録でしたが、高学年5人のうち2人は縄を回し、残りの3人が低学年の背中を押すという役割を担(にな)い、高学年全員で低学年を支えていました。

どのチームも、本番はもちろん練習でも、「せ～の～で～」というタイミングを合わせる声や「ハイ・ハイ」というリズムを合わせる声が多くなり、チームの一体感がどんどん高まっていくことがわかりました。また、失敗したときには、「がんばれ～」や「おいしい、おいしい」という励ましの声が次々とかかり、失敗を責めずに温かい言葉や心で包み込む姿が見られるようになりました。大縄跳びの取り組みを通して、思いやりの心が育っていくことを実感しました。



地域で活躍する子どもたち

第44回郡上市少年剣道錬成大会

◆ 5年生男子個人の部【優勝】 篠 文也

◆ 団体の部【3位】 一北剣少

青地晟良 猪俣彩花 大中結太郎 桑田理史 篠和希 篠文也 大中陽太郎

郡上市教育委員会表彰(文化功績)

三輪倫士

井上尊仁